

歯科技工士の歴史は、その技術の進化とともに、職業としての資格や立場の変遷も反映しています。日本における歯科技工士の歴史は、室町時代にまで遡り、当時は仏師など木製の義歯を製作されていました。義歯が登場し、技術が発展するとともに、歯科技工士という職業の重要性が増しました。しかし、歯科技工士の職業としての整備が本格化したのは明治時代であり、西洋歯科医学の導入とともに、歯科技工士という職業が認められ、役割が明確化されました。

明治時代後期、近代歯科医療が日本に普及する中で、歯科技工士の専門職としての立場が確立され、技術者としての重要性が認められました。そして、1955年に「歯科技工法」が制定され、歯科技工士の資格制度が法的に確立されました。歯科技工法では、歯科技工士の資格を定めるとともに、業務が適正に運用されるように起立し、もって歯科医療の普及及び向上に寄与することを目的としております。

現代においても、歯科技工士は進化し続け、デジタル技術の導入や新素材の開発など、絶え間ない技術革新の中でその役割を広げています。本講演では、「温故知新」の精神を基に、過去の技術や制度を振り返り、現代の歯科技工士がどのようにその歴史を受け継ぎ、発展させていくかを探ります。さらに、これからの歯科技工士に求められる新しい役割や制度的な改革の方向性についても考察し、未来の歯科技工士像を描いていきます

## 自由課程 歯科医療における歯科技工の真髄

### ～歯科技工士の存在意義と歯科医師との連携の重要性～

歯科技工士は、歯科補てつ装置の製作を通じて歯科医療の質を支える重要な役割を担っている。高度な技術と専門知識を駆使し、機能性と審美性を兼ね備えた歯科補てつ装置を提供することで、患者の治療成果に直接貢献している。そのためには、歯科技工士と歯科医師の密接な連携が不可欠であり、情報共有を通じて患者のニーズに適した補てつ装置を製作することが求められる。

近年、CAD/CAM 技術や 3D プリンターなどのデジタル技術の進展により、歯科技工の分野にも大きな変革がもたらされている。これにより、作業の効率化や精度向上が期待される一方で、アナログ技術との融合や新たな課題への対応が求められている。歯科技工士の役割も進化しつつあり、従来の技術に加え、デジタル技術を活用した新たな製作プロセスへの適応が不可欠となっている。

本講演では、歯科技工士の存在意義を改めて認識し、歯科医師との連携の重要性を考察する。さらに、デジタル技術の進化がもたらす可能性と課題を踏まえ、歯科医療チームとしての協力体制の強化を図ることで、より高品質な治療を実現し、患者にとって最適な歯科医療の提供を目指す方策について検討する。